埼玉県高等学校 PTA 連合会　専門委員会研修会「高校教育と PTA」部会
講演「写真で広がる視点、出会いで変わる自分」覚え書き
講師　風景写真家　佐藤　尚　氏
＊写真を紹介しながらの講演のうち、言葉のみをメモした簡易な記録。

自己紹介

４７都道府県、車中泊して写真を撮っている。今はデジカメが主流。昔は大きなフィルムで撮っていた。１４、５年にわたり見沼田んぼでワークショップを主宰している。提示した写真の前の方に移っている若者は埼玉栄高校の写真部員。コラボして、写真展も一緒にやった。もう卒業したが、今も写真を撮ってくれていると嬉しい。新潟の魚沼にもよく行く。栃尾の油揚げが大好き。炙って酒を飲む。納豆を挟むと格別。子供の頃、小３から中２にかけて、南米ペルーに住んでいた。それで、帰国してからの愛称が「ペル」。写真集、写真展は日本全国の風景をテーマにしている。

今日は２部構成でお話しする。

第1部　埼玉の写真

日常と違う現象を狙って

写真を見て、自分の変化を見てほしい。目の前の風景そのものを撮る。長瀞、羊山公園、川越。日常と違う現象を狙う。

・秩父市 美の山公園の雲海。街の明かりで幻想的な風景になっている。
・小鹿野町 子ノ神の滝。
・木漏れ日。
・旧小川小学校下里分校の木造校舎と桜。想像が膨らむ。この桜の下で記念写真を撮ったであろう親子だとか、昔こういう校舎に通ったな、とか。
・さいたま市秋ヶ瀬の野焼き。サクラソウを保護するため。さいたま市で野焼きをする。激しい写真。色はきれい。臭いと熱はすごい。10ｍほどの距離で撮ったが、危険だった。カメラを持つ手の甲が焼けるよう。
・さいたま市 別所沼公園。早朝の人口密度に驚く。ラジオ体操やランニングで。メタセコイヤの葉が小雨で水面に落ちたらきれいだろうと思い、夜景を撮りに行ったらこのような風景。暖色のロマンチックな光。シャッタースピードを 30 秒にして撮ったらこうなった。

風景に思いを込めて

・雪の竹林。かぐや姫のイメージ。
・見沼田んぼの藁塚。フナノという。「三匹の子豚」の長男の家のイメージ。
・軽トラックに桜をかぶせた写真。さあ農作業が始まるぞ、という季節感。
・見沼自然公園の池に氷が張り、残った水面に鴨が寄り添う様子。寒さと同時に温かさを感じてほしい。
・グミの実。赤い実が連なるのを音符のように感じた。その下を人が通るのを待っていたら、農作業に向かう自転車の女性が。チリンチリンという音をイメージして撮影。
（埼玉ではないが…）
・長野市中条の棚田。女の子二人が遊んだ後、畦に腰かけている写真。二人は写真展にも来てくれた。そこに暮らす人との触れ合いを求めて旅をしている。
・モントリオールでの写真展「In the Heart of Japan」のメインビジュアルは福島市花見

山。桜、民家、ごちゃごちゃした真ん中に鯉のぼり。そこに暮らす人のたくましさ、復興への希望を表現したかった。

コロナ期に身近なものを

コロナで移動がままならなくなった時期。近所を散歩した。身近なものに発見がある。2020 年写真展「ぼくの散歩みち」では道端の草、墓地、猫などを作品に。散歩に出かける楽しさを感じた。緊急事態宣言中も、絞りを試しながら一生懸命に撮った。

・戸田競艇場で思いがけず雨。雀が雨宿りのために手すりに飛んできて止まるだろうと予測して待ったら案の定来たので撮った写真。

・楓の葉は新芽の時に赤いことがある。「いかに目立たせるか」をあざとくやる。人は白いところに目が行く。白いところの前に見せたいものを持っていく。

「ぬくもり」から「ぼくとさいたま」へ

2024 年 1 月の写真展「ぬくもり」は、61 歳になる直前、還暦のうちに一つことを成し遂げたいという展覧会。桜の芽吹き。ぼけの花をわざとピンボケに。美しいと思ったものを撮った。

2025 年 8 月「ぼくとさいたま」。見沼田んぼをかたどってひょうたん型の DM にした。

・家族連れと一人遊びの子供の対比。涙しながら撮った。

・秩父の街並み。この場所にいたくない時に、町から外に道が通じていて、外に出ていけるよというのを表現したくて展示のトップに持ってきた。ペルーから帰国して、環境になじめなかった少年期の自分史。

・水面を泳ぐ鳥の姿に自分を仮託した写真もある。自分史をどう描いていくか。

・2025 年 4 月に秩父市大滝で撮った写真。ガレ場。朝ドラ「あんぱん」が始まり、主人公の夫のモデルがやなせたかし。同じ名前なので、ドラマの中で「たかし」と呼ばれるたびに自分のように感じていた。たかしの義父が「絶望の隣には希望がある」と言った言葉が心に響いた。このガレ場を見た時に、「絶望の隣に希望があるとはこういうことだ」と感じて撮った。「映え」写真を撮っていた頃とは自分が変わってきたと感じた。ぬくもりのある写真を撮りたかった。

・狭山丘陵。「となりのトトロ」のメイちゃんのトンネルそのままのような風景。我ながらよく見つけたと思う。自分の中にも「メイちゃんのトンネル」はあると感じていた。ワクワクドキドキがあった。

・深谷市荒川。岩にとまるセキレイ。飛び立っては何度も戻ってきてまたとまる。「自分の居場所を見つけたんだ」と思いながら撮った。

・秩父ミューズパーク。日の出の写真。前日に雪が降ると予報があった。当日雪が降ってからでは入れないと思い、前日のうちに山の上まで行き車中泊。日の出の時間には他に誰もいなかった。

・見沼田んぼ。高速道路とさいたま新都心のビルを遠景に、手前には藁の束が積み上げられている不思議な風景。現代の都市と昔からの稲作の営みがつながっている。

第2部　ワークショップ

県外の写真を中心に。

・山梨県。降雪の予報で山中湖に向かい、冠雪を撮る。

・秋田県。水没林。雪どけ水が入る一瞬しか撮れない。

・福島県喜多方のひまわり畑。

・群馬県。彼岸花。昔は「仏教関係は縁起が悪い」と広告関係で使われなかったので撮らなかったが、最近はよく撮る。
・北海道美瑛。
・青森県。

二人の先輩

影響を受けた先輩写真家の話。６０歳を過ぎて我が道を行くようになった方々。

一人は富田文雄さん。６０歳くらいで写真の撮り方が変わった。観光地の写真を撮らなくなった。自分のレギュラーの仕事を後輩に譲って出版にシフト。写真集に力を入れるようになった。日本の風景を写真集として出版。レギュラーの仕事を思い切って切らないとできないという姿を、１０年くらい前に目にした。

もう一人は関戸勇さん。６５歳くらいから、デジカメの画素数が増えるのに対して、「カメラはスマホでいい。撮りたいものを撮れればなんだっていい。」と言って、スマホだけで写真展を開いた。

先輩たちの姿を見て、私も写真を楽しんでいこうと思うようになった。

被災地を応援したい

中越地震の写真。繁く魚沼に通った。地震の時は福島にいたが、翌日新潟に向かった。震源地木沢には入れなかった。トンネルを通れず、5時間くらいかけて山を越えて入った。山古志の隣。山古志は全村避難だったが、木沢は人が残っていた。収穫後だったから食べ物はある。水はどこかから引いてくる。道は治す。
・はざ木に稲をかける写真。１００歳くらいの人が働いている。すごい。
・東日本大震災。石巻に通って写真を撮った。写真で応援したかった。被災地できれいな写真を撮って復興を応援したかった。

今いる場所でつながる

しかしやめた。「そんなことをしている場合ではない。今自分がいる場所が大切なんじゃないか」と思った。「里ほっと」チラシを配って「ワークショップをやります」と言ったら４人来た。個性的な人たち。それから多くの人が集まるようになった。散歩して写真を撮るだけ。写真を撮るよりおしゃべりばかり。楽しい。笑う。人の輪が広がった。趣味で女子会をやったり、バスケ部ができたり、私は呼ばれてないのに横浜に撮影会に行ったり、個性ある人たちが思い思いに活動している。自分はここにいて、いわば、「駐車場の管理人」のような存在。「写真展やろうよ」となって３回やった。

災害の時、地元に友達がいることが大切だと思い始めた。実は飲み目的。ワークショップをやってよかった。見沼田んぼのよさの再発見にもつながった。見沼田んぼを象徴するものは何もない。富士山もない。何を撮ってもいい。これを撮らなければならないというものがない。

結び

第１部と第２部の話。果たして伝わったかどうか。伝わらなかったかもしれないが、写真はたくさんあったのでご容赦を。
・ひまわりの写真。ひまわりの葉が、あたかも右手を顔の前にかざして「ごめんなさい」と言っているかのように見える。「ごめんなさい」にも敬礼にも見える。これは擬人化。ひまわりの花を撮るには葉が邪魔だと思う人もいるかもしれないが、擬人化も写真を撮る楽しみの一つ。

最後に３分間のスライドショーをご覧いただいて終わりにする。